

「十字架の言葉」(1コリント1章18-25節)

1 党派争い

コリントは地中海に面したギリシヤの港町で古代ギリシヤではアテネやスパルタと並んで繁栄した都市国家です。

コリントに伝道したのはパウロです。彼の、いわゆる第二回伝道旅行で、アテネからコリントに来たパウロはここに一年半滞在し伝道したことが使徒言行録18章に伝えられています。

コリント伝道でよく知られているのはアキラという名前のユダヤ人とその妻プリスキラとパウロの出会いです。この二人はパウロがコリントに来る少し前、ユダヤ人追放令のためローマからコリントに避難して来ていたのですが、パウロと同じテント造りであったため親しくなり、パウロは彼らのところに住み込んで一緒に仕事をしながら伝道しています。コリントからエフェソに向かったパウロにアキラとプリスキラの夫妻も同行し、パウロの要請もあつたのでしよう、エフェソにとどまり、いわゆる家の教会を形成し伝道したのです(16章19節)、ローマの信徒への手紙ではパウロは彼ら二人を「命がけでわたしの命を守ってくれた」(16章35節)人として名前をあげています。

パウロがコリントの次に行ったのはエフェソです。そこで書かれたのがコリントの信徒への手紙一です。コリントを去ったパウロのもとにコリント教会の様々な問題が持ち込まれます。パウロに質問が寄せられたと言ってもいいかも知れません。それらに答えたのがこのコリントの信徒への手紙一です。

取り上げられている問題は多岐にわたります。聖書の小見出しを見ていただくだけでおおよそのことが分かります。党派争いの問題が最初に取り上げられます(1ト章)。次に不品行、訴訟、結婚、偶像にささげられた肉を食べることの可否、礼拝での女性の服装のこと、かぶり物の問題にも少しですが触れられています。さらに聖晚餐、霊の賜物、そして復活の問題が最後に15章で語られます。体の甦りを語る15章はこの手紙ばかりでなく新約聖書の頂点をなす章です。キリストの復活の使信が、この手紙でパウロは様々の問題に具体的に福音的な見解を示しているわけですが、それらの基礎にあると考えてよいと思います。

今日の聖書箇所は、パウロが取り上げた諸問題の最初の問題、すなわち党派争いへの戒めが語られている中にあります。党派争いのことをここではただ「争い」と言っています。「ねたみや争い」(3章3節)ともまた「仲違い」(1章10節、口語訳は分争)とも呼んでいます。

わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちが知らされました。あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言いついておられることです(1章2節)。

アポロはアレキサンドリア出身のユダヤ人で聖書に詳しく雄弁で知られた伝道者です。エフェソのほか、コリントでも活躍した。ここにあるようパウロがコリントを去ったあとアポロ派ができるなどの影響を及ぼしました。ケファは言うまでもなくペトロのことです。

たいへん興味深いのは、三つないし四つのグループの中に「わたしはキリストにつく」という人たちがいたことです。キリスト派です。しかし彼らが正しいとは言われていません。どういうことでしょうか。仮に正しかったとしても、一つの党派として現れたとき正しくなくなつたと言つてよいのではないのでしょうか。どのグループも自分たちは正しいと考えています。とくにキリスト派はそう考えています。しかし彼らが党派争いに加わつたとき、つまり正しくないと批判した人たちと同じ土俵に立つことで、彼らも自らの正しさを失つたのです。キリスト派は、仮にそこに真理があるとしても、それは失われて、分派の一つになり下がるということです。じつさい教会に党派争いがあると聞かされてパウロは「わたしはキリストに」という人たちを正しいとすることはまつたくありませんでした。問題にすることもありませんでした。

むしろ問題だつたのは「わたしはパウロにつく」というパウロ派ともいふべき存在でした。そしてパウロはその人たちの味方をするつもりもなかったのです。むしろ真つ先に彼らを強く否定しています。「パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によつて洗礼を受けたのですか。クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼を授けなかったことを、わたしは神に感謝しています」（1章13-14節）と。

パウロはパウロ派を否定しただけではありません。それと共にアポロ派も否定しました。「だれも人間を誇つてはなりません」（3章21節）と書いて、こう述べています、「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになつた分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神です」（3章5-7節）。問題はコリントの信徒がいつも人間を基準にして考えているということです。たとえキリスト教人間であつても人間が偉大になつてはならない。神がその中心でならなければならぬのです。コリントというところは古い伝統をもつギリシャ文化に彩られてきた町です。ギリシャ文化の中心には人間主義ともいふべきものがあります。人間ではなく神を中心に考えなさい、神の事柄へと立ち返りなさい、キリスト教の原点へ立ち返りなさい、これが分党派争いに対するパウロの立場です。

す。求めるのでもない、探すのでもない。十字架の言葉はすでに語られています。神の子イエス・キリストが十字架にかけられたということ、そのこと自身が私どもに対する言葉です。

2 十字架の言葉

問題が人間ではなく神である時、人間をほめたたえたり人間の力により頼んだりす

ることではなく、神からの誉れを願い（4章5節）神により頼むことである時、人の救いの根本にあつて私どもがそこに立つべき言葉、それは「十字架の言葉」にほかなりません。

十字架の言葉は、滅んでいく者にとつては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です（2章18節）。

「十字架の言葉」とは、十字架を指し示す、それを証しする言葉、あるいは十字架が私どもに語りかける言葉という意味です。

十字架というのは、当時のもっとも恐るべき刑罰の道具です。罪人を処刑し木にさらす、つるすということは旧約聖書もふくめて古代オリエントでは広く行われていました。それがやがて十字架刑となりローマでも行われるようになったものです。ただしローマではローマに対する政治的な反逆者などに対して、いわば見せしめのようにおこなわれていたものです。人間をもっとも辱め、もっとも苦しめ、もっとも卑しめるものとしてあつたのです。

神、あるいは神と目されるものが、そうした辱めを受けるといふことは、当時も今も宗教において考えられないことです。ユダヤ教において、ギリシヤ人にとつて、おそらくは今日の仏教でも神道でも、そうしたことは聞いたことのないことであるに違いありません。

ユダヤ人はしるしを求め、ギリシヤ人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています（1章22-23節）。

ユダヤ人が求めていたのは「しるし」と言われます。目に見える神の栄光の現れを求めていたということです。ギリシヤ人は「知恵」を探すと言われます。人間のよりよい生き方です。仏教であれば、どうでしょうか、悟りを求めるといふようになるでしょうか。現代人なら、どうでしょうか。あくなき豊かさでしょうか。それとも自己実現でしょうか。

これに対してパウロは「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています」と言います。第一に重要なことは、パウロは探しているのではない。求めているのではない。宣べ伝えるのです。矢印が反対です。すでに真理はそこにあるのです。求めるでもない、探すでもない。十字架の言葉はすでに語られています。神の子イエス・キリストが十字架にかけられたということの中に神の私どもへの言葉があります。

何を語っているのでしょうか。それは、神は私ども人間と、この人間には私が含まれ、あなたが含まれ、すべての人が含まれます、その人間と同じ所に立たれた、いやそれでは十分ではない、極みまで卑しめられて人間と同じ所に、極みまで苦しめられて人間と同じところに、極みまで辱められて人間と同じ所に、降りてこられた、人間

のどん底に立たれたということです。イエス・キリストキリストは死にて葬られ、そして「陰府にくだ」ったということです。神からもっとも遠いところに、神なきところに立たれたということです。神なき闇の中に立たれたということです。闇の中にいる人間と共にあるためです。十字架はそれを私どもに語ります。それが十字架の言葉です。

3 インマヌエル・アーメン

現代人はあくなき豊かさを追い求めます。そうして追求が他人の、あるいは他国の貧しさを呼び起こすことになっても、その追求が未来世代に多くの重荷を負わせるのになってもです。私どもの想像力はそこまで及ばない。現代人はあくなき自己実現を求めます。それは自分だけを満足させようとして悪魔的情熱に変わってしまうときもありません。それは時に他人を傷つけても満たされなければならないものとなります。

十字架の言葉はそれにこう問います。その自己追求の中にははじめから終わりまでただ自分しか存在しないのではないかと。そこに暗闇があります。プライベートという単語は奪い取るという言葉から来たものです。他人との関係を失った私的個人、真の自己を失った人間、その傍らに神が立たれます。神との関わりの中で他人と共にある自分が取り戻されます。

十字架の言葉は神がキリストにおいてどんな時にも私どもと共にいますことを語ります。インマヌエル、神われらと共にいますと語ります。それは私どもに私どもがそのまま神に受け入れられていることを語ります。

戦前のクリスチャンで橋本鑑という人がいました。〔1903（明治33）年の生まれ。東大で宗教学などを学び、東京の信濃町教会で高倉徳太郎の薫陶を受け、東京神学社や同志社で学び大阪の香里伝道などを手がけた人です。その求道的な姿勢は彼の周辺にいた人々に深い影響を与え、1943（昭和18）年39歳で病死しました〕。この人は福音的称名（唱名）というものを主張し、インマヌエル・アーメン！と念仏のように唱える行為ですが、これを実践していた人です。戦争の時代、それに加担せず、公同の教会を求めて伝道に取り組んでいました。念仏のようにとなえるのは、私もついていけないところはありますが、キリスト教の福音をインマヌエル（神われらと共にいます）という一点でとらえ、それにひたすらアーメンとなえるという信仰と服従には打たれるところがあります。

さて十字架の言葉、それは、神はキリストにおいて徹底して自らを低くし、私どもと共にいますということを語っています。罪の深みに沈む私どものところまで神様が来てくださるにはそれ以外の方法はなかったということです。それが御心になかったことであることは、このイエス・キリストが甦らされたことで明らかにされたのです。それが神の知恵であり、それが、私ども「救われている者」（18節は現在形で理解）にとって、神の力です。「神の国は言葉ではなく力にある」（4章20節）。十字架の言葉は私どもの本当の生きる力です。

（2018年7月1日）